

ガザ報道のなかで、宋継堯さんのことを考える

田浪 亜央江

広島に来てから安野の中国人強制労働と西松建設に対する裁判の経緯を知り、2019年以降は毎年、「継承する会」主催でこの時期に行われる集会に参加してきた。その集会に今年は「行けない」と判断したのは、10月に入ってパレスチナ情勢があまりに緊迫しており、長らく現地と関わってきた筆者にとっては他のことが手につかない状態となってしまったせいだ。この小文も、大規模な虐殺が進行するガザからの生々しい証言に耳を塞ぐようにしながら書いている。

この事態を黙って見ていることは許されないと声を上げる広島の人たちの姿に、このかん救われて来た。視覚的に明確なメッセージを広げるのが何よりも大切だからと、原爆ドーム前のスタンディングを呼びかけたのも私自身だ。そうではあるのだが、同時にやり場のない思いも澱のように堆積してゆく。ガザでの虐殺を止めるための声をなぜあえて「広島から」と強調するのか。「広島から声を上げる」ことの特別な意義とは、いったい何なのか。

あえてこんなふうに、まるで広島に対して「喧嘩を売る」ようなことを言うのは、広島が「復興」を遂げたようにはガザが復興することなど決してないという絶望的な見通しのためだ。パレスチナの人々は、もしも生き延びたらその先に復興への希望がありうるというような、戦時下の「国民」とは違う。彼らは主権や市民的権利を持たない「難民」なのだ。大規模な攻撃が終わったとしても無権利状態のまま放り出され、多くの人々がガザからさえ追われることになるだろう。

ここまで書いてきて、筆者が今このタイミングで宋継堯さんの人生にたどり着くまでの細い糸を、ようやく手繰り寄せられたような気がする。宋継堯さんのことを最初に知ったのは、2019年5月、数人でフィールドワークに参加した時のことだ。絶望と疲

労と空腹のなか、石を積んだトロッコを押していた時にカーブ上でブレーキが外れ、トロッコもろとも投げ出された宋継堯さんは、怪我をして失明した。安全など顧慮されない労働環境によって起きた「事故」のようすを、川原さんは地面に置いたトロッコの模型を使いながら、巧みに再現してくれた。おかげで生前お会いしたことのない宋継堯さんのことを、時には「思い出す」ことさえ出来るようになったのだ。

だが、私が今考えたいのは、事故そのものではない。痛みあまり、自分で眼球を絞り出して潰すことで少し和らぐほどの苦痛や、目の痛みと不便に耐えながらの辛い帰国の行程、休む間もなく続く生活の苦勞。見えない目で何度宋継堯さんは日本での経験を思い出し呪っただろう。目の見えない人たち数人で村々を回って歩き、習った講談で投げ銭を得ながらの不安定で脆弱な生活。宋継堯さんの「戦後」は、日本の「戦後」を生きた人々の多くの経験とは全く異なるものだった。広島が復興モードを強めていったとされる1950年代末になっても、宋継堯さんは見えない目を晒しながら物乞いをする生活を強いられたのだ。

本来なら集会に参加し、宋継堯さんのその後の人生や、裁判における闘いの軌跡についても詳しく知りたかった。少なくとも今言えることとして、筆者がこれからも学びたいと思うのは、戦中の日本の政策によって自国から強制的に引き剥がされ、自由を奪われ過酷な体験を強いられた宋継堯さんのような人が、その責任を負うべき当事者からの補償も制度的な保護も受けることもなく、難民のような状態で長年生き延びたその足取りであり、それを掘り起こしてきた安野の裁判闘争や和解事業を担ってきた人たちの〈思想〉のありようである。